

子どもと先生を育てる

授業のABC

文・絵 阿部宏行



Handwritten signature

授業は子どもと先生を育てます。

学校は夢を描き育むところです。

学校は豊かな心と確かな力を身に付けるところです。

人は成長します 夢も成長します。

夢は自分のことだけでなく 人や世界の幸せに向いています。

自分だけの幸せは 幸せとはいえません。

夢は本当の幸せに向かい大きく広く そして 深くなっていくのです。

授業は子どもを育てます。

授業は先生を育てます。

先生を育てるのは、子どもであり、授業なのです。

私も、あなたも、こうして育まれてきたのです。



もくじ

子どもと先生を育てる

「授業のABC」

はじめに3

第1部 学校がみえる

① 学校って何のためにあるの？	4
② 社会で人としてよりよく生きるために	5
③ 「勉強」ってつらいもの？	6
④ 「面白い」のはいけないこと？	7
⑤ 「楽しい」と「うれしい」	8
⑥ 失敗は挑戦の証	9
⑦ 学習する場としての学校	10

第2部 授業がみえる

⑧ 授業は発表会ではない	11
⑨ 学びは共感のもとに育つ	12
⑩ 授業を構造化する	13
⑪ 面白い先生の面白い授業	14
⑫ 「させる」指導から「する」指導へ	15
⑬ 授業を変えたいと思ったら	16
⑭ 積極的な模倣を生かす	17
⑮ 教材づくりは楽しい	18
⑯ 否定する時そこに根拠がある	19
⑰ 発問のちがいに着目して活用する	20
⑱ 寂しさを感じる時	21
⑲ 板書で授業を構造化する	22
⑳ 板書のABC	23
㉑ よい授業への第一歩	28
㉒ 先生の実顔	29
㉓ 「意見」という励まし	30

第3部 子どもがみえる

㉔ ほめる言葉は知恵を育てる	31
㉕ イメージは理解を深める	32
㉖ 子どもがよく見えている先生に	33
㉗ 行動することからはじまる	34
㉘ 子どもに見えても大人に見えない	35
㉙ 子どもは対象に入ってみる	36

第4部 喜びがみえる

㉚ 教えなくても「教育」はある	37
㉛ スタートはいつも「子ども」	38
㉜ マンガはあたたかい	39
㉝ 先生！お絵かきですよ！	40
「お絵かきのABC」	
㉞ 自分を見直す10のルール	47



むすびにかえて 48

幸福は力になる

幸せって何でしょう。

今から20年ほど前に、「子どもの夢」のアンケート調査で、東アジアの子どもたちの夢には「お父さんの仕事がほしい」「学校に清潔なトイレがほしい」など、自分のことより、他の幸せを願う夢が寄せられました。その時、日本の子どもたちからの回答は「ゲームがほしい」など、自分のことばかりでした。それを見て当時は、日本の子どもたちにかっかりしたことを覚えています。自分のことだけではなく、他の人たちの幸せを願う子どもたちになってほしいと思いました。

それでもこのごろは、考え方によって自分の幸せや願いを表現できるのは、私たちの国が平和で、安心して生活できている現れではないか、と思えるようになりしました。普通のことや普通に行ける幸せは、「学校」にも普通に行くことができるという安心の上に成り立っているということです。

その学校が、子どもたちにとって幸せを育む夢や希望に満ちていて、それも普通に得られるとしたら、この国はとても幸せなのではないかと思うのです。

けれども、大人の都合で「幸せ」を感じることでできずにいる子どもたちが存在するのも事実です。真の「豊かさ」が問われています。

学校や教育に対して、騒ぎ過ぎる大人が多いのではないのでしょうか。

教室では、今も夢や希望が育まれています。教室での営みを感じ取ることでできる大人が、教育の問題の是非を問えるのではないのでしょうか。

子どもたちは冷めた目で、騒ぎ過ぎの大人や社会を見るようになります。

子どもは大人を見ています。大人は子どもの目を直視できているのでしょうか。今、子どものまなざしをしっかりと受け止める大人の度量が試されています。

吉野弘が誕生した娘に贈った詩があります。

この願いは、私たち大人すべての願いと同じです。

「お父さんが お前にあげたいものは 健康と 自分を愛する心だ ひとがひとでなくなるのは 自分を愛することをやめるときだ。自分を愛することをやめるとき ひと他 人を愛することをやめ 世界を見失ってしまう 自分があるとき 他人があり 世界がある」*1)

誰もが、自分を見失わず、人とともに生きることを願っています。

私たち大人は、子どもに何を保障すると誓えるのでしょうか。求めるのはそれぞれの「幸福」です。幸福は力になるのです。*2)

私たちには、子どもたちの幸福のために何ができるのか、問われています。

1

学校って何のためにあるの？



学校は、一人一人の夢を育むところです。もう一方で、システム化された場所でもあります。先生一人に対して、多くの児童・生徒そして学生が学んでいます。多くの人に対して指導し学習するには効率的な場です。この機能を使うと、一人の考えが多くの人々に伝達・周知され、思うように動かすことができます。指示一つで多くの人を動かす軍隊の兵士などを育てるには、最適な場所なのです。ですから、教えることの吟味が十分になされていないと、間違った方向へ導くことになってしまいます。

我が国において、教育の目的は「教育基本法」にしっかりと明示されています。個人の人格の完成と社会を形成する人間をめざして教育を受けることとなります。ですから、自己を形成するとともに、人類がつくり上げてきた知的遺産を継承し、将来の社会を築くために学校があるのです。

自分だけが成長するわけではありません。他の人とともに成長し、誰もが幸福な社会を築こうとすることが大切なのです。

世界には、学校に行きたいと願っていても、国の事情や戦争で学校へ行くことのできない子どもがいます。その子どもたちにとっても、「学校」は希望なのです。そうです、学校は「希望」なのです。

子どもの希望としての学校を、私たちは地域社会と協力して、よりよいものにしていかなければなりません。そのトップランナーが「先生」です。

！ 今日明日も、ずっとずっと学校が大好き！

人と人との間で生きる



「人間」は、人と人の中で生きるもののことです。ですから、人は、人と人との間で、他の人とともに生きることで、はじめて人間らしく生きることができます。他の人とともにあることは、「人間」であるための条件です。

言葉は、他の人とコミュニケーションをとるためにあります。言葉を使い、話すということは、他の人から話しかけられることを前提としています。やはりそれは、他の人とともに生きることを表しています。

私がかく私>であるためには、自分がかく自分>であり、人間がかく人間>であることを意味しています。私たちが生きる世界では、他の人なしには生きていくことはできないのです。

子どもは、家族を基盤にしなが、幼児期の幼稚園や保育所など、他の人といっしょに生活する社会で生きています。その原初的な場が「学校」なのです。そこで人といっしょに生活し、楽しく、学びの場として実感できることが大切なのです。

現代社会において学校のような集団で生活する場を過ごす時期は、20年近くになります。そこでは人生を豊かに暮らすために、多くの基礎を養っているのです。

学校は、自分をつくっている場です。そこに生活する先生もまた、子どもとともに自分をつくっているのです。



学校は自分をつくる場です。

3

「勉強」ってつらいもの？



「勉強」という漢字は「勉めて強いる」と書きます。「強いる」とは無理に押し付けることです。我が国において勉強は、「我慢して、無理してやらなければならないもの」という考えが根底にあります。果たしてそうでしょうか。子どものころは「よく遊べ、よく学べ」といわれてきました。この「遊び」のとらえ方が、時代とともに変わってきているように思います。

「学び」には、自ら進んで主体的に行うものとする考え方があります。主体的といえば「遊び」も同じです。幼児期などは、遊びそのものが学びです。みんなと砂場で遊んでいる時には、社会性や創造力などが育まれます。それが、小学校から教科学習が本格化するようになると、「遊び」は、「勉強」と反対の極にあるものように扱われはじめます。遊びは、気晴らしであり、享樂的な扱いを受けるようになります。学びが「勉強と遊び」に分けられ、硬直化していくのです。

私たちは、知識は「与えられて得る」と思い込まされてきました。勉強は「遊び」の反対語で、「学び一遊び＝勉強」という図式が染み込んでいます。本来、学びは面白く、学校だけに限定されないことを知っているはずなのに、大人は「勉強」というものに縛られています。心身が硬直しはじめている大人に、今まさに必要なのは「学びほぐし」ではないでしょうか。

まず大人である先生が、型通りの経験を解きほぐすように、「学びほぐし」が必要です。そのためには、子どもと接して、「今まで当たり前と思っていたことが、当たり前ではなかったことに気付く」ことが大切です。子どもが出合った事象に対して目を輝かせ、学ぶことを楽しんでいる姿に心を寄せることです。子どもを知ること、子どもの力を信じること、その上に指導が生まれるという原点を知ることです。

学びの原点を知ることです。

4 「面白い」のはいけないこと？



子どもたちに感じてほしいのは「学ぶことは面白い」ということではないでしょうか。学ぼうとする力は、「教える」「教わる」関係からは生まれにくく、自らが進んで取り組むような意欲が喚起されなければなりません。「スパルタ式」と呼ばれ、子どもを厳しく取り扱うと、根性が芽生えやる気を起こすという考えも一部にはあります。しかしそこには、「教える」側だけの論理が働いているように感じます。「教わる」側の心理や精神状態にまで配慮されていないことが多く、「教わる」側に学ぶ喜びが伝わりにくいのだと思います。

「学ぶことは面白いこと」と声に出すだけでは、面白いと感じ取れるようにはなりません。

「学べ、学べ」という時の「学び」の対象が限定されていませんか。机に向かって集中して行うものだけになっていませんか。

人生にはいろいろなことがあるように、「学びの対象」にも、いろいろあることを自覚することです。

料理をすることも学び、ものをつくることだって、自転車に乗れるようになることだって、立派な学びなのです。私たち大人は、いろいろな学びを重ねて大きくなってきたのです。

試験勉強のように「覚える」というようなものが「勉強」という考えを解きほぐすことが大切です。

ベルギーのフェラール・ラーバースは、「居場所感」と「夢中・没頭」*1)が教育の質の前提にあるといいます。仲間とつしよに夢中になって活動に取り組む経験が必要なのです。「面白い」と「楽しい」、学ぶことは「楽しい」のです。子どものころに、時間を忘れて夢中になったことを思い出してください。

面白い授業をめざしてみませんか。



「楽しい」と「うれしい」、どちらも喜びが伴った「快」の感情が動いた時に発せられる言葉です。けれども、使い分けがあるようです。「今日の砂遊び楽しかったね」「昨日、お父さんにグローブを買ってもらってうれしかったよ」。

「うれしい」は、他者から「してもらったこと」で「快」を感じていることが多いようです。「楽しい」は、対象に浸ったり、味わったりすることで「快」を感じていることが多いようです。

さて、学習はどうでしょう。学習という対象に浸って、「楽しい」という「快」の感情はどんな時に湧き出ているのでしょうか？

ここに「楽しさ」の実相をとらえたものがあります。

- ①自発・主体性の発揮「したいことをする楽しさ」
- ②全力の活動「全力をあげて活動する楽しさ」
- ③能力の伸長「できなかったことができるようになる楽しさ」
- ④知識の獲得「知らなかったことを知る楽しさ」
- ⑤創造「考えだし、工夫、つくり出す楽しさ」
- ⑥有用・善行「人の役に立つ・よいことをする楽しさ」
- ⑦人格の承認「存在を人に認められる楽しさ」
- ⑧共感「共感する楽しさ」
- ⑨出会いと認識「よりよいものに出会う楽しさ」
- ⑩愛・友好「好きな人とともにある楽しさ」*1)

どうでしょう。「学校が楽しい」という子どもで満ちることは、学校の目的が達成されていると、同意義ではないでしょうか。

家庭の団樂で「おかあさん、今日も学校がとっても楽しかったよ」と、子どもの喜びの声が響くとしたら、幸せですね。家族もうれしくなります。

楽しいはうれしい、うれしいは楽しい。

6

失敗は挑戦の証



学校は成功経験を積み重ねるところですが、実際は、その何倍も失敗し、何度も挑戦し努力して成功をつかみ取っています。ですから、「行動には失敗が付いている」といってもいいでしょう。失敗を怖がっている、得られるものも少ないのです。

つまり、課題を見付け、解決の道筋を考え、努力を繰り返し失敗を解決するということを経験する場所が、学校なのです。

教室は、もっとも多くの失敗と成功が繰り返される場であることを、子どもに伝える必要があります。

友だちの失敗を唾^{つよ}うようなことのない学級づくりをするのが先生の仕事です。

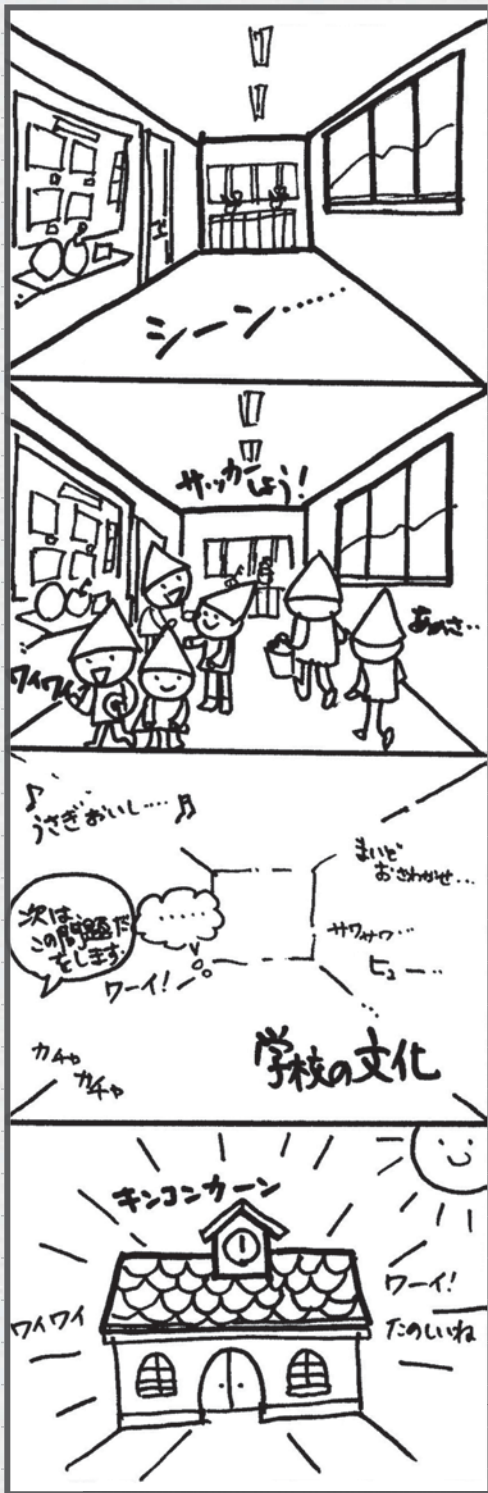
アメリカのメジャーリーグで活躍するイチロー選手は、4000本安打の記録を打ち立てた時、記録達成の蔭にある8000回の失敗の方が自分にとって価値があると話しました。失敗の一つずつを悔しさの材料にして、前を向いて記録を打ち立てたというのです。

失敗から多くのことが学べることを、歴史は証明しています。戦争などのように、人間は過ちを犯してきました。その都度、繰り返さない誓いを立てて現在に至っています。「過ち」は許されないことです。日常において、しようとは思っていなかったけれど間違ったり、失敗したりすることは、繰り返し起こります。

自転車に乗ることができるようになったのは、何度も転んで失敗したあとに得られた成功なのです。

失敗は挑戦の証と考えてみると、挑戦の向こうに成功があるといえます。

挑戦の数だけ成功があります。



学校は、「教育基本法」にも掲げられているように、人格形成の場であり、幸福な社会を形成する人間を養成する場です。またその内容は、人類が築き上げてきた文化や知的財産の継承です。その直接的な場が学校ということになります。ですから、学校には「未来」があるのです。

学習の場として、どんな環境が子どものために用意されることが大切なのか、どの学校も、地域の方々とともに考え、子どもの学習環境を整えようと努力しています。

まずは、学習環境として大切な一つとして「音」があります。静かな環境をどうつくるかです。朝や休み時間など、校内放送で先生の呼び出しなどがあります。緊急を要する場合がありますから、一概にはいえませんが、職員室から近い教室であれば、動いて伝えることも大切です。緊急時のために放送の数を減らすことで得られるものが多くあります。教室で営まれている子どもと先生の語らいを中断させてしまう場合もあります。頻繁になると、子どもの放送に耳を傾ける意識を希薄にさせてしまいます。

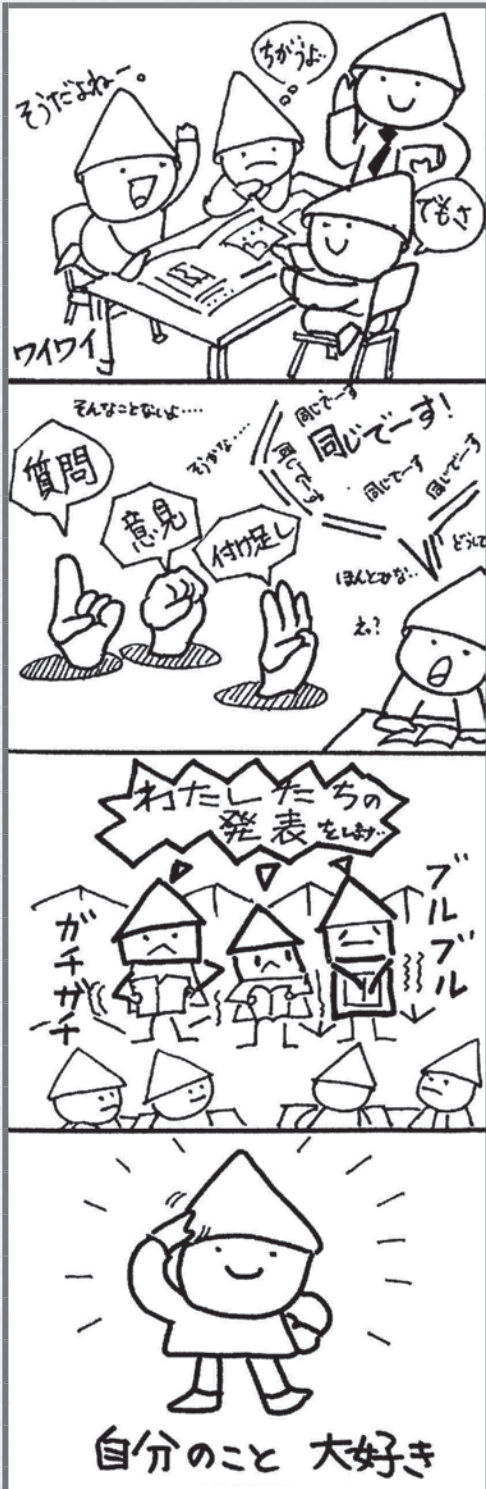
他のクラスから流れる歌声、窓の外の木々を揺らす音、鉛筆が紙の上を行き来する音、廊下で給食を乗せた運搬台の食器が奏でる音、用務の方が廊下を掃除する音、どれもが学校の文化を表す音です。

「音」だけではありません。匂いや目に訴える視覚情報も同じです。

廊下の掲示物や飼育室の環境、花壇の整備など、どれも学校に欠かすことのできない文化なのです。

学校の文化は、様々な人の営みによってつくられています。学校の文化は、子どもたちの原風景になるのです。

学校の文化を育むことです。



学校の基本は授業です。子どもは多くの時間を学校で過ごしますが、大半は授業です。その授業の一つ一つが成長に欠かすことのできない大切な時間です。

今、子どもの中で何が起きているか、何を学んでいるかを見取る視点を常にもち合わせることです。

そのために先生は、子どもの傍で、寄り添いながら子どもの思いを見取るという姿勢を保つことが大切です。子どもがよく見えている先生に近づく道です。

しかし、授業の効率や表面だけ繕うと子どもが見えなくなることがあります。たとえば、「同じです」の大合唱だったり、グーは賛成を表す指サインだったり、一見すると子どもの考えが見えるように思いますが、本来の子どもの姿が見えなくなってしまう。「同じです」の大合唱に、子どもの心が埋没するのです。つぶやきを聞き取る技術を持ち、子どもの本音が表れるつぶやきやささやきの出る授業をつくり上げることです。

台本を読み上げるだけの発表会のような授業では、考えない子どもを育てることになりかねません。先生の都合や形だけを真似ても、真の理解を生み出す指導にはならないのです。

「話し合い」と「学び合い」はちがいます。結果のわかっている発表会は、子どもの考える力を削ぐことになります。囲んで話し合う時には自由に本音を語るのに、発表会のような屏風を開いた形にした途端、萎縮する子どもたちがいます。周囲の子どもの息遣いが感じられないことで、身体間が遠くなり、孤立する子どもたちが生まれるのです。

授業は、子どもの生きる営みです。自分の力で課題を解決する経験を積むところです。失敗が許され、失敗を乗り越える場所が学校です。成功経験が自尊感情を育て、自分のことが好きになり、自分に自信をもつことができるのです。

授業は子どもの生きる営みです。



試験のための勉強は、記憶装置の拡大です。学びの構造が変わらず、知識量だけが増えて、試験後には、剥落することが多いものです。

学びの構造が変わるとは、学び方が変わることであり、自分が変わることといえます。そのためには、まずもって主体的であるかどうかです。心のもちようと主体的な行動が伴うことで、学び方も変わります。失敗さえもよい経験と、発想することができます。

そのためには、一人一人の考えを共感的に支える環境があることが大切です。学級集団はその一つです。「友だちの意見を聞いて同感する人は、拍手して」と、友だちの声に耳を傾け、共感する態度を「拍手」という行動に変えることで、子どもの心を育てることができます。

グループで学習する意味は教室での学びを一人学習にしないことです。学習における孤立化を防ぐことです。その一つの解決策として、向かい合った4人グループの島をつくることがあります。隣同士いつもいっしょにいるというグループ学習を基本にすることです。

そこで繰り返し広げられる学び合い、補い合いが、学びの質を変えるのです。互いの様子が目や耳、雰囲気からも感じ取ることのできる4人を基本にした島をつくることです。そこでは、操作しながら・音読しながら・身体を動かしながらという表現する過程で生み出される考えや思いが伝わるのです。互いに息の合う距離が、子どもに安心感を与えます。

この談話的な構造が、子どもたちを夢中にさせる状態をつくり出すのです。指示や説明など、一斉に理解させたい時に、個別指導とバランスよく組み合わせることで構築することが大切です。

学びは共感のもとに育ちます。

10 授業を構造化する



先生は、毎日繰り返される授業の一つ一つを全身全霊で行いたいと考えますが、なかなか難しいものです。「指示と説明」を繰り返すような授業では、子どもの「考える」という大切な能力を育てないままに終わります。

「考える楽しさ」を体験する授業は、子どもの成長にとって大切な経験となります。

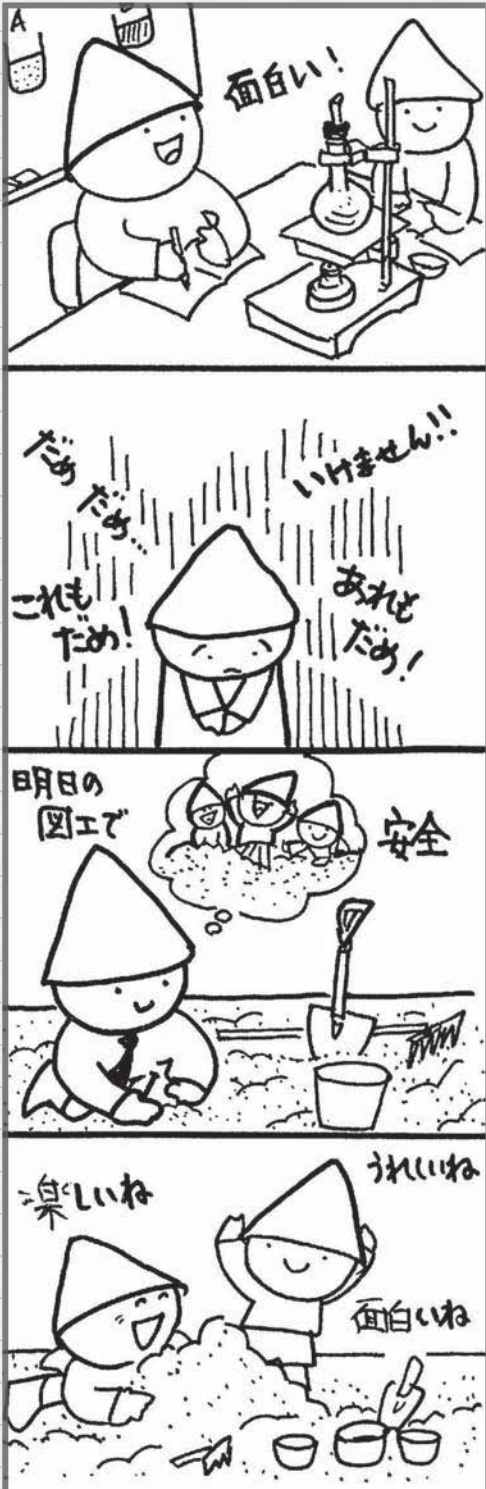
「考える」授業をつくるには、ドラマの筋立てのように構想して、授業の構造化を図ることが必要です。

まず、授業の展開と大まかな子どもの反応を予測します。次に、授業の山場となる場面を焦点化することです。その場面は、子ども一人一人が主体的に思考・判断する具体的な場面です。そして、その山場へのアプローチを考えます。

そのポイントとなるのが、矛盾・拮抗・対立などで問題を際立たせることです。子ども一人一人に葛藤場面が生じるような場面をつくるのです。矛盾が起こると、子どもは問題をはっきりつかみ、自分の立場を明確にする必要に迫られます。授業に関与感が生まれます。こうなると「子どもの本音」が出ます。子どもの本音が出る姿は、真の問いが生まれる意欲の表れともいえます。

たとえば、「だって、それはおかしいと思う。証拠がないもの」「でも、実験から得られた事実とはちがうよ」「ほくは、実際に見たことがあるよ」など、事実から経験を交えて根拠とする姿だったり、「私のこだわりは、ここです」「自分が考えたことを音楽にします」など、一人一人の個性が生きる表現の姿だったりします。本音が出る授業とは、子ども一人一人を大切にしていた授業のことなのです。

子どもの本音が出る授業づくりが大切です。



子どもたちが求めているのは面白い先生であり、面白い授業です。

その背景には、一体何があるのでしょうか。

「面白ければいいのか」「一見つまらない授業にも…」など、反論はいくつもあります。

しかし、どうでしょう。まずは子どもが支持する「面白くて、授業が楽しい」状態をつくり出してみませんか。どの教科でもかまいません。子どもが夢中になって学習に没頭する授業から「子どもの何がそうさせるのか」を感じ取り、考え、さらに授業改善に結び付けることです。

8ページの「楽しい」の分析のように、わかること、できること、役に立つことも、子どもにとって楽しくて面白い授業の要因になるのです。

子どもの「こうしたい」にどう応えるかのヒントが、ディズニーランドの掃除にあります。夢のようなディズニーランドに何度も行きたくなる要因には、乗り物や出し物、店舗などいろいろありますが、顧客を満足させる園内の清潔感も要因の一つです。

教室の子どもをディズニーランドのお客と同じように考えるのは失礼かもしれませんが、この掃除の鉄則にヒントがあるのです。第一優先は「顧客の安全」、第二が「礼儀正しさ」、第三が「ショー」、そして最後に「効率」と続きます。

はじめに「効率」だけを求めては、顧客の喜びは生まれません。先生は、「安全」であれば授業としての「節度」を保ちつつ、「楽しく・面白い」授業を考え、立ちまわることが大切です。「効率」は、前提となる安全、節度、楽しさの三つを達成させてはじめて求めるものです。子どもは、名人芸のような「うまい授業」を先生に求めているわけではありません。学ぶ喜びを感じ取れる授業を求めているのです。

つまらない授業からは、
子どもの喜びは生まれません。



ある学校の先生の話です。教育実習生が作成した学習指導案の本時の展開の「教師の働きかけ」と「児童の学習活動」の欄の語尾に、教師の働きかけが“させる”で、子どもの欄は“する”が並んでいたというのです。評価は「できる」「できない」という基準で書かれていて、指導教員が現在の学力観などを説明しても、「させる」「する」という指導がなぜ悪いのか納得のいかない様子だったそうです。

ここから何を感じ取るでしょうか。大学の教員養成の貧困を憂いますか。学生がこれまでの受けてきた指導を省みるべきでしょうか。

私たち大人は、幼稚園や保育所からはじまって、小学校・中学校・高等学校と進むうちに、先生の話聞いて、教えられたものをいかに理解し、記憶するのが学習であるかのような硬い殻を身に付けたのかもしれませんが。

ですから、先の教育実習生のように、「させる」指導が当たり前のようになったのかもしれませんが。

「させる」指導を「する」指導にするには、「学習を受け身ではなく能動的に取り組むようにする」ということが大切です。たとえば、ゲーム感覚を取り入れる、少し困難な道を挑戦するようなしくみをつくる、一人ではできないことも協同であればできるなど、工夫はいくつもあります。

しかし、面白おかしく「する」指導がよいとか、奇異を銜う指導がよいというわけではありません。

学ぶことが楽しいと感じられ、実感を伴う理解や達成感・充実感にあふれる指導であるとともに、「学力」としての定着も欠かすことができません。こつこつと努力の末に達成される喜びもあります。

先生は、子どもの内面を見据えて指導の手立てを工夫することです。何もしないのは、何も変わらないことと同じです。

子どもがするようにする指導を心がけましょう。



子どもと息が合っている授業や学級があります。

「呼吸を合わせる」など、子どもとのやりとりが絶妙な先生がいます。間の取り方や考えさせたい場面では十分に時間を取り、話だけでなく、ノートに自分の考えを書かせるなどして、子どもの思考の流れに沿った授業が展開されています。

けれども、その先生の性格や技量に着目して、自分行の授業を省めない先生がいます。もっと残念なことは、研究会に参加しても、「あの学校は子どもがいいから…」などとして、自分の授業改善に結び付けて考えることを放棄したり、批判だけして終えたりすることです。

「性格は変えられないが行動は変えられる」という言葉があります。学んだことをそのままにせず、自分の行動を変えるための鍵にするのです。「言葉を変える」「身体を変える」「心を変える」など「変えること」をはじめの一步として行動に移してみることです。心も身体も言葉もいっしょなのです。「少し変える」「一つ変える」と、少しずつ自分の何かが動きはじめます。

たとえば、返事一つからでも変わります。子どもに「はい」という返事を求める先生が、自身の返事を反省し、子どもに呼ばれたら「はい!」と答えるといった具合です。

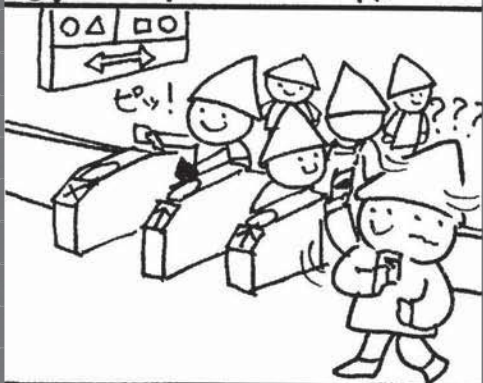
「言葉を変えたら指導が変わった」「指導が変わったら、子どもが変わった」「子どもが変わったら、授業が変わった」「授業が変わったら、先生が変わった」「先生が変わったら、学校が変わった」「学校が変わったら、地域が変わった」「地域が変わったら、子どもが変わった」へと動き出すのです。

先生が変わると学校が変わります。

いっしょに遊んでいる



鑑賞の能力を働かせて



学習にとって重要な「積極的な模倣」と「消極的な模倣」があります。

図画工作の能力の一つに「鑑賞の能力」というのがあります。名画を見て作家の名前を覚えたりする能力ではありません。自分の作品や友だちの作品を見たり触ったりしながら、よさを感じ取り、自分の表現に生かそうとする能力です。

自分の表現に生かそうと積極的に模倣しようとする力が「鑑賞の能力」です。人間だけが、身の回りの人の行動を積極的に真似しようとする力を幼い時から身に付けているそうです。乳児期の同年齢の集団でも、周囲の子どもの行動に興味を感じるといいます。ですから、私たちは真似をしながら成長してきたともいえます。大人も、はじめて体験する機器などは、周囲のやり方を真似して手順を覚えたりします。

教室の子どもたちも、学び方はそれぞれです。階段を一直線に登ることを先生は求めがちですが、子どもたちは有機体のように、友だち同士助け合いながら、それぞれ情報を出し入れして学んでいるのです。

一方、「消極的な模倣」は、単純に同じようなことを繰り返すような「なぞり」だけで、自分だけの創意や工夫はありません。それは、型紙の通り切り取るなどの「作業」と同じです。

人間の想像力と創造力は常に密接に関わっています。ですから、創意や工夫が、自分の「こだわり」となって現れます。「消極的な模倣」に終わらないのが人間です。「積極的な模倣」は、自分をつくる大きな役割を果たしています。

人間は、積極的に真似しながら育つのです。

15 教材づくりは楽しい



授業の魅力の一つに「教材」の面白さがあります。教材を自分の足で探して、授業にする楽しさです。総合的な学習の時間や社会科など、地域をもとにした授業などは教材づくりのやりがいがあります。子どもの興味・関心を呼び起こす教材には、熱中して学習に取り組ませる魅力があります。

興味・関心だけが熱中する授業を生み出すわけではありません。同じ教材でも見方や考え方を変えるだけで、魅力ある対象になります。何気なく見ている郵便ポストが置かれている場所も、郵便収集車が回りやすいように決められていることを発見する社会科の授業があったり、作者の意図を言葉から見付け出す国語の授業も、夢中になったりします。そこには、子どもが授業を自分ごととして、関与感を高めていく過程があるからです。授業の導入場面だけ奇抜で興味をもたせても、授業の経過とともに意欲が失われていくようでは意味がありません。新たな発見や疑問が現れるような展開が、子どもの追究を生み出します。見えないものがどんどん見えてくるような、わくわくする面白さです。

身の回りには「素材」がたくさんあります。先生が素材に学習価値を加えて子どもに提示すると、それは「教材」になります。教材づくりは、先生の創造的な営みなのです。

一つの例ですが、地域を歩いて見つけた「運河」をもとに地域の歴史を学ぶことができます。たとえば、川の流れて逆らって荷物を積んだ船を下流から上流に運ぶには、どんな工夫が必要だったのかなど、運搬や船舶の工夫に先人の知恵を学ぶことができます。また、運河を造る時に掘り出した土はどうしたのか、日本各地の運河の周りに柳の木が多いのはなぜかなど、当時の治水や土木技術などと合わせると、教材の幅はさらに広がります。

授業の幅が広がる教材づくりは先生の喜びです。



先生が「発問」する時には、予め、子どもからの反応を予測しています。

私たちも、誰かに質問された時には「わかること」「わからないこと」そして、「曖昧なこと」があります。どちらにも属することのできない「曖昧な状態」の時の多くは、そのまま流したり、いい加減に頷いたりして、終わらせようとしています。

子どもにも同じようなことが起こります。

そんな時には、曖昧な状態のまま授業を進めるのではなく、「ちがうよ」という反応を意図的に使うことが大切です。「ちがう」を答えるには、何らかの根拠があるからです。子どもの内面にはっきりした根拠を求めるのです。

たとえばAとBを分類しようとして、はじめに先生から「どっちですか?」と聞き出すのではなく、まったく関係のないCの反応を先生からもち出して発問すると、子どもから「ちがうよ!」と反応が返ってきます。その根拠を聞くと「だって、今はAかBを聞いているのにCは、〇〇だから」というように、自分なりの「根拠」をもとに答えます。

「根拠」に支えられた答えに確かな実感が生まれます。この場合の「根拠」は、大人のような客観的な論理を指すものではありません。

発達によるところが多いのですが、ここでいう「根拠」とは、自分なりの意味や価値をもったまとまりということになります。その「根拠」を子どもの考えとして受け入れることが大切です。

子どもの考えは、どれも認められることが授業の大前提です。

「根拠」に支えられた解答を導くことです。

発問



・もっとありませんか
・ちがう考えは…
・見方を変えると…

「拡散的な発問」
～考えを広げたい～

・同じ考えの人はいませんか
・共通することは…
・まとめると

「収束的な発問」
～考えをまとめたい～



授業の鍵

ほ化?



これでいい?

あっ?!

より深く
より高く
次のステージへ

そっか!



「発問」には、学習をコントロールする役目もあります。子どもに尋ねながら授業の流れをつくっていく役割です。授業の導入など、子どもからいろいろな考えを引き出したい時には、「拡散的な発問」を意図的に使います。「誰も気が付かなかった、こんな考えもあるよ」「もっとないかな」「ちがう考えはない？」など、単調に流れがちな授業に幅をもたせる働きをします。また、まとまりかけた授業を拡散させて、一層活性化させる働きもします。

他方、授業をまとめたい時、子どもの考えを具体的にしたい時などには、「収束的な発問」が活用できます。「同じ考えの人はいませんか」「共通することは何だろう」「まとめるとどんな言葉になるかな」など、広がり過ぎて收拾に困った時などには有効に働きます。

他に、異なる立場から考えるために視点を変えることを意図した言葉、共通点や相違点から考えを類推させる言葉、ディベートのように立場を明確化して根拠を問う言葉など、使い方によって、子どもの考えの広がりや深まりを求めることができます。

やはりどんな授業においても、全体をコントロールするのは先生です。子どもとの応答をもとに、時宜を得て「授業の鍵」となる発問をする必要があります。「授業の鍵」となる発問は事前に決めておきます。その発問によって授業の山場が生まれ、活性化させたり、まとまりをつけさせたりすることになるからです。

1年生の算数の授業です。^{*1)}「●○○○」を提示して、先生が「●は何番目？」と発問すると、「1番目」という答えが返ってきます。先生が「それで終わり？」と聞き返すと子どもたちは考えます。「あっ！4番目」という子どもが現れます。「え?!」という他の子どもたちの反応があり、「そうか、右はじから左へ4番目」という起点と方向の意味を確認することになるのです。「まだある!!」

授業の鍵となる発問は先に決めておきましょう。



授業や職場で寂しさを感じる時があります。

■「黒板を写しなさい」

子どもに「黒板を写しなさい」という時です。

意図をもって書き写したり、要点をまとめながら書いたりするわけではありません。

黒板を書き写すことだけの授業は、子どもの学びへの入口を閉ざしています。子どもは「写している」ということに安心を感じているだけで、「考える」ことを拒否しています。

■「どうしてこんなことも」

「どうして、こんなことも、わからないの?!」「昨日教えたでしょ!もう忘れたの?!」と怒鳴る自分がいます。子どもが帰ったあとで自己嫌悪に陥ります。様々な要因があるとわかっていても、つい出てしまう言葉です。もしかしたら、自分に投げかけられているのかもしれません。

■腕組み

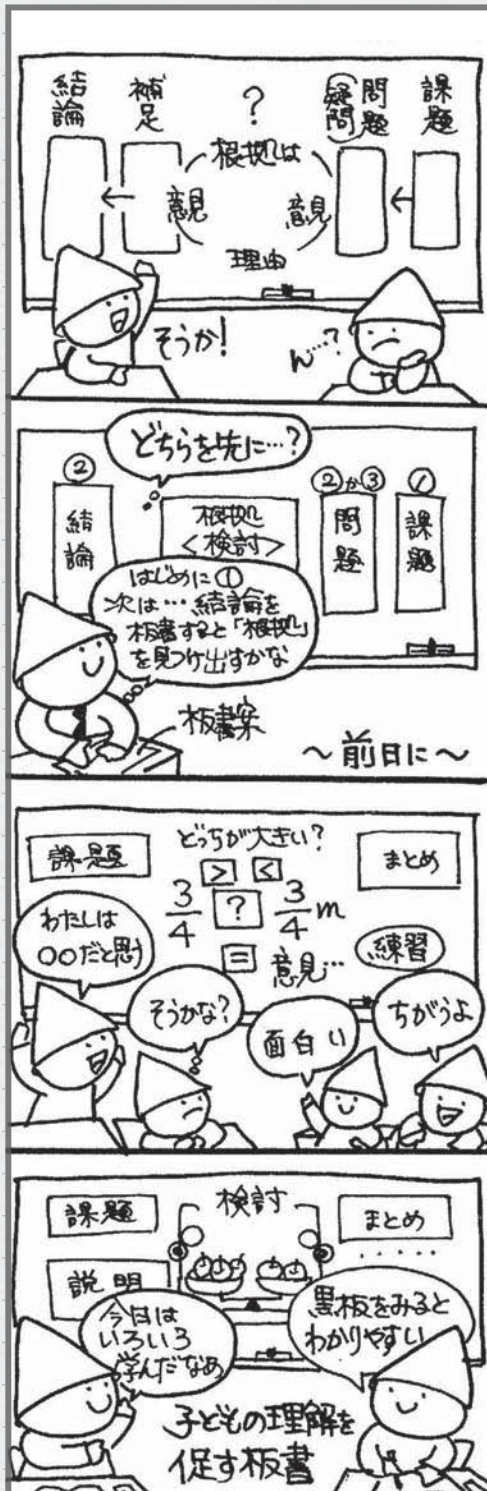
授業参観などで、教室の後ろで腕組みをしている人を見ることがあります。楽な姿勢なのでしょう。しかし、見られている側にとっては、緊張や拒否、威圧などを感じてしまいます。

■ため息

ため息をつくことは誰にでもあります。疲れた時「ふー」と思わず出てしまいます。その他に悩みや落ち込んだりする時にも出ます。けれども、周囲の人はそのため息を聞くと、意欲を吸い取られるような気持ちになります。一つため息をつくたびに、幸せが一つ逃げるともいいます。周りの士気にも影響するのがため息なのです。

それでも、身近な人でよくため息がもれる人には、「どうしたの?私でよければ聞いてあげようか?」と心を向ける気配りも大切です。

もう一人の自分が、自分を見つめてみると…。



板書は、授業を構造的にする働きをもっています。指導案とともに板書案を考えておくと、授業を構造化させることができます。

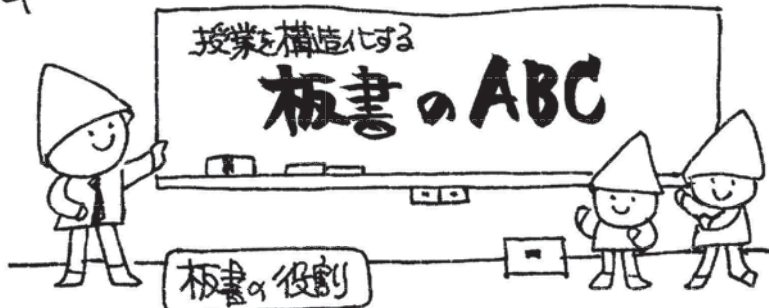
授業の中心となるねらいへ向かう発問をする時に、言葉だけではなく、黒板で発することもできます。子どもが「どうして?」「なぜだろう?」と考えを巡らせる時に、黒板に「どうして?」と書き加えるだけで、子どもたちの思考は具体化し集中します。また、授業を大きく展開したい時やまとめに入りたい時などにも、書く位置や場所を変えたり、黒板に大きな枠を書いたりすることで、「ここにまとめの言葉が入るよ」という無言のメッセージとなります。

授業では、子どもの反応を予測することができない不安があります。意見を出させて授業のねらいに収束させたいと考えるのであれば、「板書案」をつくっておくと、授業に対する不安を小さくすることができます。それは、子どもの反応を予め予測することにつながるからです。

しかし、子どもの反応の予測は、あくまでも、指導案上の予想に過ぎません。その時の子どもの思いを大切に、授業をつくり上げることです。子どもの稚拙な言葉でも、「あなたの意見は〇〇〇としていいですか」と、発言した子どもの理解のもとに板書することです。

自分のつくった板書案にこだわり過ぎて、子どもの気持ちから乖離していく板書では意味がありません。同僚の先生の板書を参考にしながら、子どもの理解を促す板書を考えましょう。

板書案は、授業のナビゲーターです。



- ☺ 情報を共有する：情報を確実に伝えることができる
- ☺ 学習の理解と定着を図る：学習のポイントをまとめて理解を促進する
- ☺ 授業のまとめ（先生のノート）：板書がノートのまとめ方の見本になる
- ☺ 話し合いを焦点化する：校内研修や会議で話し合いを焦点化し促す

Point

1.

基本の
レイアウトを
決める

- ビジネスに
何をかくか

2.

文字の大きさ
など

- としなやかに
かくか

3.

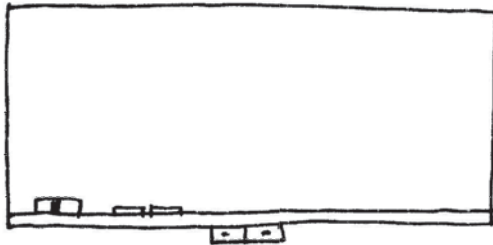
板書の
タイミング

- いつとみらい
かくか

4.

子ども
いかに
学ぶを共有
する

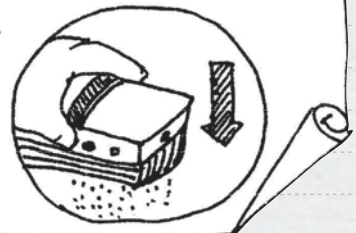
まず、黒板はいつもきれいにすっきりと



- ◎ 掲示物や月日・日直などは、側面などの掲示板を利用する
- ◎ 短いチョークは収納し新しいチョークを常時使うように用意しておく
- ◎ 黒板消しは、複数置き、いつもクリーナーできれいにしておく

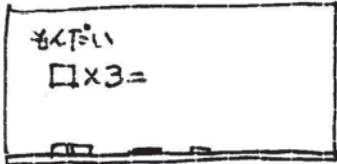
● 黒板の消し方 ●

- ① 基本は上から下へ（チョークを落す）、そのあと横に消す
- ② 黒板消しの下側を浮かせて、斜めに当て消す
- ③ チョークの粉は掃除の時に水で拭きしておく



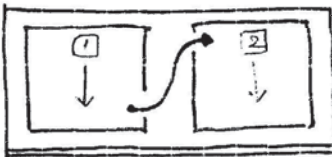
板書の基本 ①

😊 横書きのレイアウト

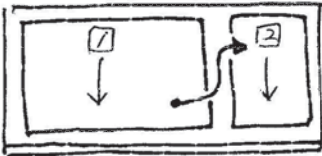
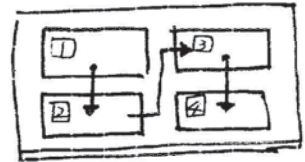
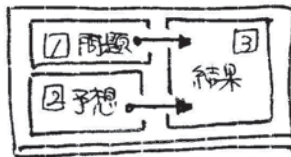


左から右へ →

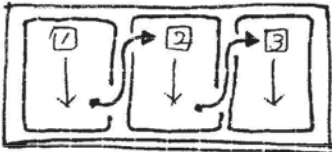
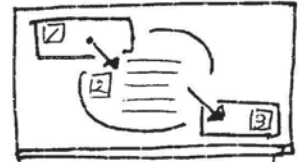
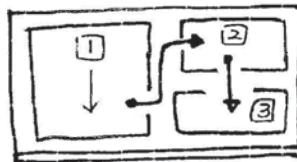
黒板をいくつかブロックに分けて書くと読みやすく、理解を促すことになる。



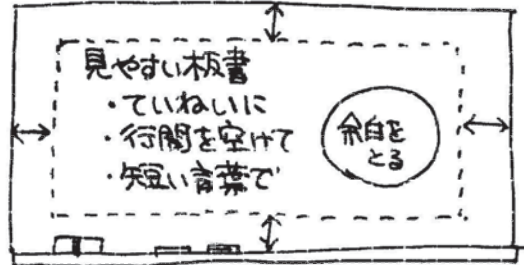
2段組 ①



2段組 ②



3段組



● 黒板消し一つ分程度内側に書く

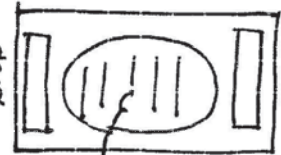
😊 縦書きのレイアウト



← 右から左へ



上下2段



子どもの意見を中央に



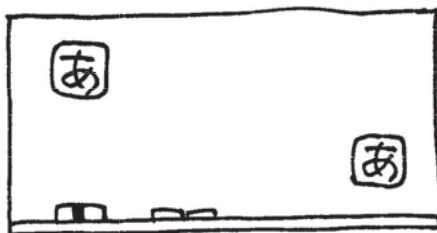
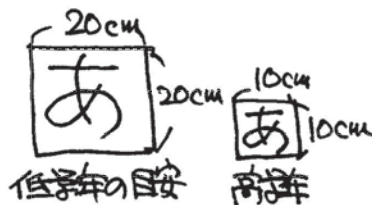
文字はきれいに書くことよりも
ていねいに書くことを心がける



板書の基本 ②

☺ 板書の文字の大きさ

- 教室の後ろの子もたちにもはっきり見える大きさにする
- 重要なことは大きく書いて強調する
- 教室の後ろに行って読みやすいか確認する



☺ チョークの色の使い方

- 基本は、白
- 最も重要なところは、赤
 - 困ったり、線を引いたりして強調する
- 目立たせたいところは、黄
 - 線・記号・矢印 など
- 青チョークは、文字として使用しない？

☺ 一番後ろの席の子どもがはっきり見える大きさと西の量が大切り！

子どもノートも対応させる
白 → 鉛筆
赤 → 赤ペン
黄 → 青ペン

☺ チョークの持ち方



- チョークは親指・人差し指・中指の3本の指で持つ
- チョークの下の方を持つ
- 塗りつぶしなどは、親指と人差し指で「はさむお」にして持つ



チョークは回しながら使えば書きやすい

短く切ったチョーク「太線用」にするのもOK!

板書の技を磨くために

板書案は
学習指導案

- ① 参観日は、絶好のチャンス
- ・授業の流れがわかるように板書する
 - ・事前に目標などがいておくのよい
 - ・子どもたちの活躍の場をつくる
 - ・板書案を自分のノートに作成し、前日に流れに沿って練習する

- ② 校内研修で板書を鍛える
- ・話し合いの内容を板書し、論点を明確にする
 - ・参加者の意見を板書に反映することで、関与感が生まれる
 - ・大切なことを聞き取る力が身に付く
 - ・予め予想される意見を分けておき板書に位置付ける

- ③ 子どもたちへのメッセージ
- ・詩や自分の言葉で子どもたちの気持ちや前向きになるような板書を前日書いておく
 - ・授業の目標・今日のめあてなど

板書が変わると
授業が変わる



〔1単位時間で1板書〕

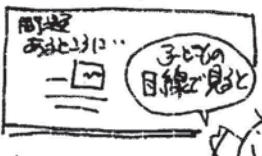
- ・板書はメモではない。途中で消さない。
- ・板書案は、50%の時間で授業に臨む。あとの50%は子どもと向き合う。

- ④ 先輩の板書は近くの家庭教師

- いい板書を見る
 - ・職員室に戻る合間に不意に見る
 - ・許可を得て写真に記録し、師の板書と比較する
 - ・その先生からコツを聞く
- いい板書をまねる
 - ・他校の研究会などで板書や掲示物、教室環境を参考にしまねる

⑤ デジカメで記録

- ・あの時の板書 どうだったか... 記憶より記録
- ・子どもたちはどんな板書を見ていたか




気付くことが多い

文科省のホームページ【CLARINET】

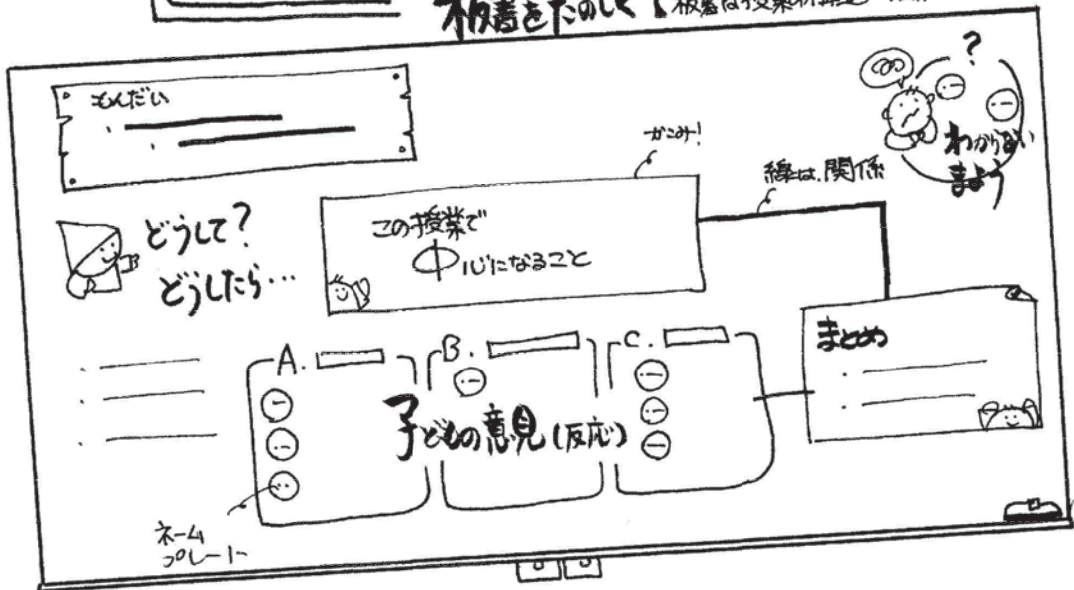
▷ 子ども達が望む板書(中学生)

▷ 検索サイトで「板書」を調べる

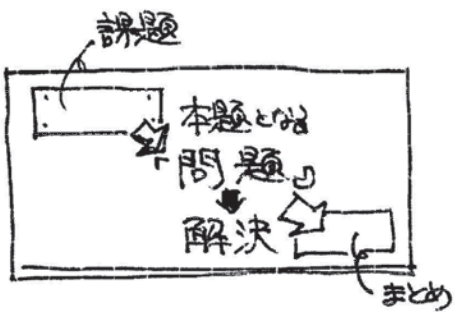
いっしょにがんばりましょう!



板書をたのしく【板書は授業の構造・授業のまとめ】



板書は 授業を構造化する。



- ・課題は、「つかみ」「枕」
・落語などの本題に入るための誘い水
- ・本題は、子どもに考えてほしい場面
- ・まとめは、「落ち」
・どこで ・どこかに

「本題」の2つ

- ・対立(対峙)
- ・矛盾
- ・拮抗
- ・焦点化

子どもに葛藤が生れる (真の問題になる)

[拡散]
・いろいろな方向へ考えを広げる

教師 (発問・板書)

[収束]
・いろいろな方向から一つの方向へ集める

解決の方向へ



「わかること」は喜びです。わかる授業をめざす場合の指針があります。

わかる授業にするために、どんなことが必要でしょうか。まず、教科書を大切にすることです。教材研究をする時も、指導に迷った時にも教科書です。また、授業の流れは、略案でもかまいませんが、子ども一人一人の顔が浮かんで始めて、指導案（細案）になります。

子どもと遊んでいるうちに、子どもの特性を知り「そうか、子どもってこうなのか」と気付いて指導方法が浮かんできます。授業中、先生をしっかり見つめ、「学びたい」という子どもの顔を見付けることができれば、「わかる授業」への第一歩です。

子どもに支えられ、子どもから「今日の授業面白かったよ」といった賞讃を得た授業の記憶は忘れることはありません。これが「よい授業」をめざす次の一歩です。

「よい授業」にゴールはありません。常に挑戦です。子どもの心へ寄り添いつつ子どもの考えに身を委ね、子どもとともに成長しようとする気持ちが大切です。

授業後は他の人の批評に耳を傾けつつも、授業の最終評価者は、子どもであり、自分です。

「この程度で」と考えたら、そこですべてが停止します。終わりのない授業づくりの道だからこそ、面白いのです。先生としての面白さはここに 있습니다。

授業は教材と子どもと先生の間で構成されています。同じ指導案でも、まったく異なる展開になることがあります。そのちがいの多くは、子どもと先生との関係にあります。子どもとの関係性をどう構築するかは、先生の資質や能力であり、先生の人間性にまで及びます。子どもの声に傾聴し、子どもとともに授業をつくり上げる先生をめざしたいものです。

子どもに学び、子どもと学ぶ、子どもとともにある先生。



先生から発せられるものには、声（言葉）や仕草など、いろいろあります。

声（言葉）の第1には「指示・説明」があり、第2に「励ましや賞賛、叱咤」などがあります。

授業の場では、先生からの適切な指示や説明によって、授業が効率的に進められます。しかし、指示や説明だけでは、共感的な学びの場は構成されません。

第2の「励ましや賞賛、叱咤」などの言葉によって、学級の雰囲気は変わります。賞賛の響き合う教室は、大変居心地のいいものです。

どうですか。いま、学級では「指示や説明」に追われて、「励ましや賞賛」が少なくなっていないですか？怒鳴り声などが教室に響いていませんか？

怒鳴り声は、子どもの心を萎縮させたり、攻撃心を増大させたりします。習慣化すると、無力・無関心を生み出したり、反社会的な行動に走らせたりすることもあります。

けれども、先生から発せられるのは、声（言葉）だけではありません。第3は無音ですが、大変効果的なものがあります。そうです、表情や身体表現などから発せられるものです。笑顔、頷き、抱きなど、身体感覚を十分に生かした指導です。先生が、無表情で、いつも怒ったような慚然とした表情からは、その効果は生まれません。

先生が明るいと、教室の子どもも明るい表情になることを感じたことはありませんか。

難しい練習などは何も必要ありません。子どもの「笑顔」に応えたら「笑顔」になります。「笑顔」が「笑顔」を生み出すのです。

子どもへの一番のプレゼントは先生の笑顔です。

23 「意見」という励まし



公開研究会などで参観者から「質問ですが、評価のことを教えてください」など、質問を受けることがあります。けれども、深読みするとそのほとんどが「質問」という名の「批判」や「意見」の時があります。これらは、日本人独特の、相手の気持ちに配慮しつつ、気付いてほしいという願いから生じています。

話をする時には、相手にどんな印象を与えるかを考える必要があります。次のどちらをいわれた時に、「よし、次はがんばるぞ」という気持ちになりますか？

A 「味は薄いけど、美味しいね」

B 「美味しいけど、味は薄いね」

A・Bのちがいは、「批判」と「賛同」の順番です。いう側と聞く側との親密さなども関係しますが、はじめに叱られても、あとで十分ほめてもらえたら気持ちよく、次の行動に移ることができるということです。

このごろは、「ほめて育てる」ことが定着していますから、叱ることの難しさは、いろいろ感じます。若い人の気持ちを損ねず、やる気にさせる話し方は、先輩諸氏の課題の一つです。

授業を見ていただいて講評をもらう時には、自分から甘い言葉の部分は捨てて聞くようにします。「今日の先生の授業は、とてもよかつたよ。でも…」としたら、あとの方に、その人のいいたいことがあります。何ごとにも、「転んでもタダでは起きない」つもりで、厳しい意見をいただいて学ぶことです。

それでも、あまり疑いすぎると人間不信になるでしょうから、広い心で受け止めながら、さらに挑戦する気持ちをもち続けることです。

反省からしか学べないことを知ることです。



子どもはほめて育てるのが基本です。

「ほめる（褒める）」に似た言葉に、「おだてる（煽てる）」などがあります。時には「おだてる」ことも必要ですが、実態と合わない時などは冷めてしまいます。反対に「しかる（叱る）」があります。当人に十分な咎めがある場合には「さとす（諭す）」「いましめる（戒める）」「こらしめる（懲らしめる）」などがあります。

指導や教育の場では、「ほめる」と「しかる」の間辺りを行き来するのがいいと思います。

感情に任せて「怒る」、相手の存在を「無視する」などはやってはいけません。

ほめる時もしかる時も、子どもの顔を見て、言葉だけでなく、身体言葉も十分に使うことが必要です。

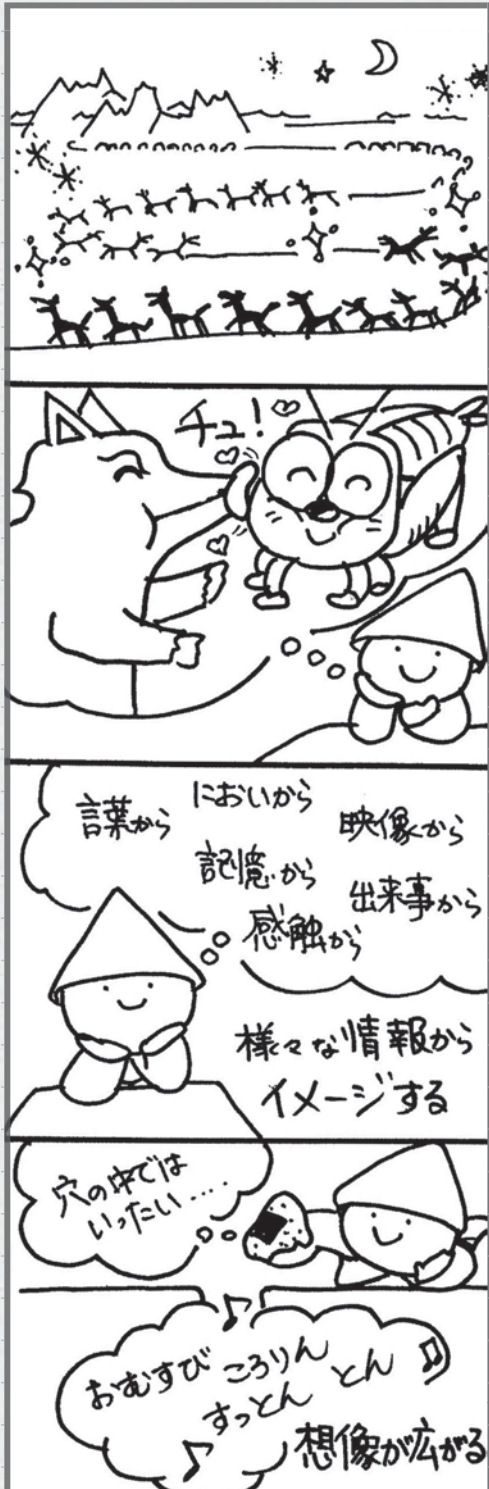
声の大きさも、めりはりをつけて、子どもに考える時間を保障することが大切です。また、「しかる」時は具体的に、短い言葉で話すことです。要領を得ない長い話は逆効果です。

ほめる言葉は声が小さくてもいいのです。子どもたちはほめられたいと思っていますから、小さな声でも聞こうとするので心に届きます。

反対に聞きたくないとき心を開かした場合には、いくら音量を上げても心には届きません。そして、考えようとしている時には、静かな時間が保障されなければなりません。

理想的な指導は、先生の権威だけを声高に押し付けるのではなく、フェードイン・フェードアウトの使い分けのように、子どもが主体で活躍する場面を構成する支援者として、やわらかな指導を心がけることです。

やわらかな指導から、やわらかな心が育ちます。



「遠くの多くの大きな狼が氷の上をはずつ通って、ほおずきのようなコオロギの頬にチューをした」

これは国語で「おうさま」か「おおさま」かなど、読み方は同じでも、ものによって使い方が異なるという言葉です。多くは「う」を使うのですが、「お」を使う言葉もあります。その「お」を使う言葉を羅列的に覚えるのではなく、心の映像とでもいうイメージを併用すると、理解が進みます。また、歌のようなリズムが生まれると、子どもは楽しく覚えます。歴史の年代を覚える時も同じです。

さて、「とおく」「おおく」「おおきい」「おおかみ」どれも、「お」のつく言葉です。狼がコオロギの頬にチューしている情景が浮かびますか？子どももきつと楽しんで覚えるでしょう。

イメージは理解に影響します。イメージすることができたから人類は、太古より身を守り、生き延びてきたともいわれます。イメージのもととなる想像力は、もちろん芸術などにも発揮されますが、広く人間のつくり上げた文明や文化の基盤となっているのです。未来を予測するのも想像力の働きです。想像力は太古の昔から人間とともに生きてきたのです。人間に備わった想像力は、この世に生を受けた時から、ともに生きて働いているのです。ですから、子どもはイメージの世界に生きているともいえるでしょう。

子どもは、大木の洞を見つけて、木の中、土の中で楽しそうに生活する動物の世界を想像します。想像をふくらませて「物語」をつくり楽しむことができるのです。子どもの見方を理解しようとする時、子どもと共有できることがたくさんあります。

子どもと一緒に想像を楽しんでみませんか。



「子どもをよく見えている先生」から「子どもがよく見えている先生」になりましょう。*1)

子どもの生命や安全を守るのは、先生を含め大人の責任です。しかし、そのことだけを全面に出すと禁止事項ばかりを口にするが多くなります。子どもを見ていても「監視する眼（子どもをよく見えている目）」ばかりが働いて、子どもの時代に、子どもが学ぶべきことが学べないままになることがあります。子どもが「どろんこ遊び」を好んで楽しもうとしても、制約させることばかりに目が向きます。発達に応じた指導を充実させることが必要です。

指導に当たって大切なことは、子どもの特性を知り、子どもが成長するために必要なことを、子ども自身の手で獲得できるようにすることです。まずは、子どもを知ること<子ども理解>です。心身の安全を基盤にして、先生ができる支援は、どのようなことを予め予測し、環境を整えるかということです。「指導者の眼」は、「子どもがよく見えている先生」の目なのです。

教育者としてのまなざしは、子どものあるがままを受け入れつつ、伸びようとする子どもに対して、期待と支援をする愛情に満ちたものです。

我が国の幼児教育の基礎を築いた倉橋惣三は、『育ての心』の中で、「まめやかさ」と題して、「子どもの力に絶えず驚きながら、その詠嘆のひまもすきもない程に、こまかい心づかいに忙しいのが教育であり、教育者である。'*2)」と述べています。まめまめしく働く様子を表す「まめやかさ」を漢字に直すと「忠実やかさ」となります。

見えてくることを受け止めることから始まります。

*1) 佐伯胖「幼児教育へのいざないー円熟した保育者になるために」UP選書 東京大学出版会 2001

*2) 倉橋惣三『育ての心』倉橋惣三文庫 フレーベル館 2008



「口さき男」と「口さき女」にならないようにしましょう。

いまでは口コミの先がけとでもいえる「口裂け女」ですが、「口先」だけで実行しない人の「できます」「やります」は、信頼を失っていきます。

美食家で料理研究家の北大路魯山人は、実行せずダラダラと生活を送り、しまいには自分の身を食べて、最期には口だけになる男の寓話を例にしながら、実行することの大切さを説いています。

「道は遠いかも知れない。しかし、その遠い道は、いちばん手近の第一歩からはじまっているのだ」*1)

授業づくりも毎日の積み重ねです。しかし、反省して、「実行しよう」と思っけていてもなかなかできないことがあります。先の北大路魯山人は「したいと思っけている心を、しようと思ひするには1秒とかがからない」といっています。

したいと思ひ心の向こうに夢があります。夢を語るのは素敵なことです。夢を「目標」に変える時、そこに「行動」が生まれます。目標の実現のためには、選択肢を絞るなど、何かを我慢しなければできないことがあります。自分を律することができなければ、第一歩は踏み出すことはできません。まずは「自力」で行動することです。あなたの「自力」の姿を見て、一緒に行動しようとする他人の支えが生まれてくるのです。「他力」はあとからついてくるのです。

小さな一歩からはじめましょう。

きつと変化が起こります。

自力が他力を引き寄せるのです。



子どもと大人の見方のちがいは、「大人は見えるものしか見えない」が、「子どもは見えないものも想像しながら見ている」ということです。『星の王子さま』の冒頭のウワバミの絵もそうです。サン＝テグジュペリや「アンパンマン」のやなせたかしには、見えないものも見えていたのかもしれませんが。「となりのトトロ」の宮崎駿にも見えるのかもしれませんが。トトロは子どもにしか見えないので、大人になるのは少しつまりません。大人は視覚優位になって、見えるものだけにとらわれ、子どものころに見えていたものが見えなくなっていることを自覚することです。

ある1年生の図工の時間でした。ウサギの絵をかくために、子どもたちは事前にウサギ小屋を訪れ、ウサギを触ったり、餌を食べさせたりしました。そして先生が、「さあ、ウサギさんをだっこして、教室に戻って絵をかくよ」といいました。すると、子どもたちは、両手を胸の前で開いて移動をはじめたのです。大人には、子どもたちのウサギは見えません。子どもは自分の机の上に、そっとウサギを置きました。子どもたちは、クレヨンで自分のウサギをかき続けました。時折なでるような仕草もしながらかき上げました。授業終了後には、また、そのウサギを飼育小屋まで戻しにいったのはいうまでもありません。

それでは、いくつまでが子どもなのでしょう。

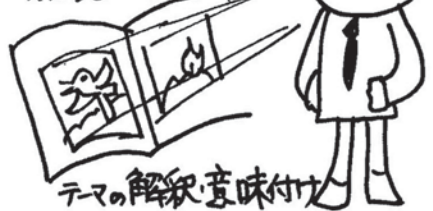
映画「子ぎつねヘレン」の原作者竹田津実は、自然あふれる北海道で獣医をしていました。ある講演で、「先生、この子を助けて」と道端で倒れていた死にそうな小動物を抱えて獣医のところに来るのは、小学校5年生までで、65歳以上も同じようにやって来るといっていました。大人って何でしょう。ものや動物に無関心になることなのでしょう。ものや動物に心を通わせることのできる素敵な子どもの時間をいつまでももち続けたいものです。

子どもの時間は子どものものです。



大人の見方 ～はなれて～

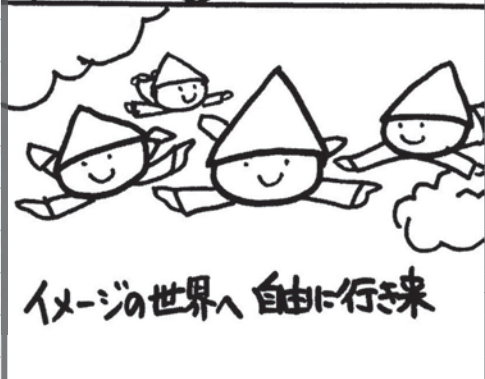
献身的な姿
努力する心の大切さ



テーマの解釈意味付け

対象の内側から 子どもの見方

～近づいて～



イメージの世界へ自由に行き来

『ハチドリのはたとしずく』という南米に伝わる話があります。

＜森が燃えていました。森の生きものたちはわれ先にと逃げていきました。でもクリキンディという名のハチドリだけはゆったりきたり口ばしで水のしずくを一滴ずつ運んでは火の上に落としていきます。動物たちがそれを見て「そんなことをしていったい何になるんだ」といって笑います。クリキンディはこう答えました。「私は、私にできることをしているだけ」＞

この話を小学校の全校集会の時にしました。子どもたちに、一つ一つをこつこつと実行する大切さを知ってほしいと思ったからです。

しかし、話のあとすぐに低学年の子どもから「森はどうなったの？」という反応が返ってきました。

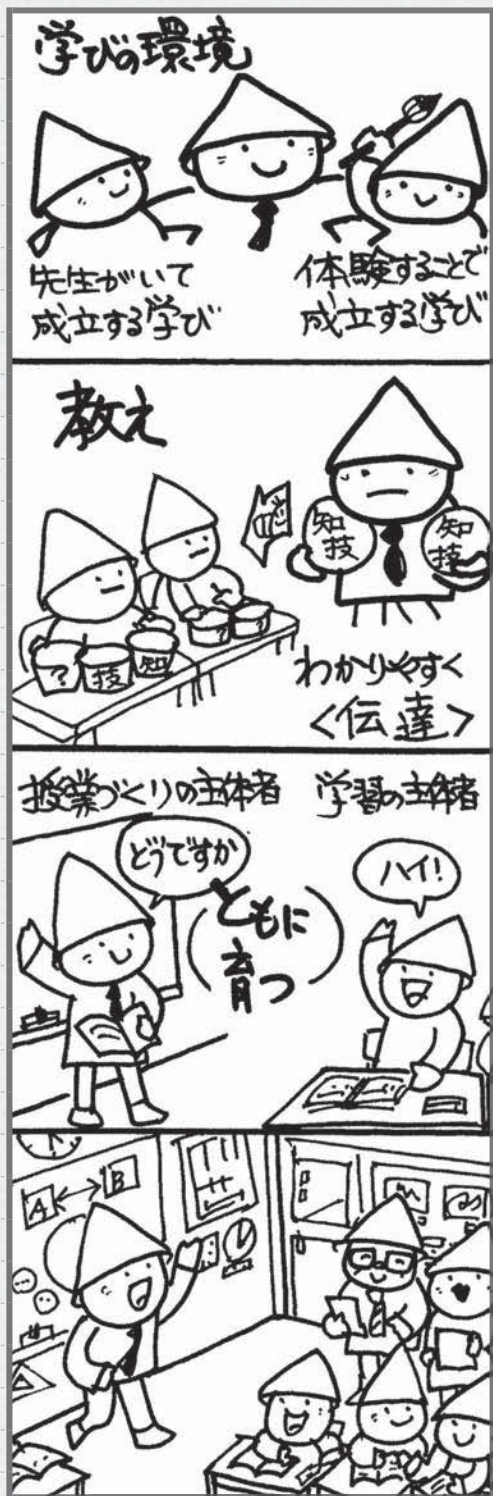
子どもたちは、ハチドリという森の外にいる動物ではなく、火に追われて逃げまどう動物たちに心が留まったままだったのです。

子どもは内側からものごとを考えようとしているのです。対象に同化することができるのです。これを、幼児性とか、自己中心的で自分のことしか見えないということで片付けていいのでしょうか。

見方が大人とちがうのです。大人は、解釈だとか妥当性などといって、自らの視点を固定して見ようとしているように思います。

子どもは、柔軟に内側から見たり、外側から見たり、自由に行き来できる力をもっているのです。なんて素敵なことなのでしょう。

子どもはイメージの世界を自由に行き来できます。



先生の教えがなくても、教育は成立するかという問いに対しては、〈成立する〉と答えます。しかし、学校教育において「先生」がいなくても、「教育」は成立するかという問いに対しては、〈成立しない〉と答えます。「教え」はなくても、子どもの学びを育てる環境（人・もの・こと）を整えることで、学びは成立します。

「教え」のための知識や技術をもつことは、先生としての幅を広げることになります。しかし、それのみであれば、知識や技術の伝達者でしかありません。

「教えるということはく芸〉であってく科学〉ではない。もし子どもを救えないのなら、せめて傷つけることだけはやめるべきだ。子どもたちのなかで経験を積むことによって、先生になっていくのだ。」*1)

先生は子どもによって育てられるともいえます。「先生」が育つことで、子どもも親もともに育つのですから、先生の資質や能力を高めることは、子どもの生き方にまで影響を及ぼすのです。

先生という仕事の多くは、子どもと共有する授業づくりです。学習の主体者は子どもです。授業づくりの主体者は先生です。

授業づくりは、先生に委ねられています。自分の授業をどう改善していくか。自分の授業の画像で分析し反省材料にすることもできます。しかし、科学を否定するものではありませんが、よりよい授業をめざすのであれば、授業を公開することを勧めます。他の視点などが入らなければ自己満足や自己嫌悪に陥りやすくなります。他の人に見ていただく機会を増やすことが大切です。保護者に公開する参観日、校内で同僚に見ていただく校内研修、また、校外の先生方に見ていただく授業研究などを進んで公開し、授業改善に生かすことです。

授業は子どもと先生の思いが育まれる場です。

*1) ジャック・グリーンシュタイン、中山容訳『先生も人間です』晶文社 1989
※ 藤岡完治ほか『成長する教師—教師学への誘い』金子書房 1998



ふまん (不満) あって ロマンなし
 ひがみ (僻み) あって かがみ (鑑み) なし
 ぐち (愚痴) あって ぐち (口) なし
 もんく (文句) あって せんく (先駆) なし
 ひはん (批判) あって ビジョンなし
 おどし (脅し) あって さとし (諭し) なし
 よこやり (横槍) あって おもいやり (思い遣り) なし

あなたが、めざすのは何? 「夢あって 行動あり」
 書店には先生の指導力をアップする本が並んでいます。指導力を競い合う集団もあります。優秀な先生方の集まりであることにはちがいません。しかし、先生同士の競い合いに終始して「子ども」を置き忘れて「先生」がいることも事実です。子どもの発達を無視して、大人の都合や論理だけで、授業を構成したり、子どもの心を無視して「強制」を平気で行ったりしていることがあります。

子どもに今、何が起きているか、子どもは今、何を学んでいるのかを常に見据えていないと、子どもは先生からどんどん離れていきます。子どもは先生の競い合いの道具ではありません。先生は、子どもと授業によって育てられるのです。学びは、子どもの喜びとともにあります。先生は、子どもの学びのために、子どもの喜びのために、<私>に何ができるのかを常に問い続け、考え、行動しなければなりません。

子どもに心を委ね、子どもを信じ、子どもの思いを受け取りながら、子どもも先生もともに育つのです。

あなたの夢は何ですか? 子どもの夢を感じていますか? 子どもの思いや願いを受け取り育むのはあなたです。

はじめに子どもがあり、
 自分を変える主体者はあなたです。



「漫画はあたたかいコミュニケーションだ」といったのは、漫画家の手塚治虫です。

マンガは、言葉で話したり、文字で伝えたりする表現以上に「対話」することができます。ユーモアや風刺などを一枚のマンガで表現することができます。さりげなく盛り込むことができるので、人間関係も円滑になり、人の心もなごみます。

いろいろなマンガがありますが、親や先生など身近な人がかいたマンガほど、子どもが喜ぶものはありません。生まれて間もない子どもには、私たちのような言葉はありません。見たり、匂いを嗅いだり、触ったりしたことを記憶に蓄積し、発語とともに概念が発達します。そうして、「もの」には名前（言葉）があること知るので。

同時期に、子どもは「かく」という表現行為を通して表現します。「なぐりかき」と呼ばれる絵や「頭足人」をかいて表し伝えようとします。

ですから、絵（マンガも同じ）は、子どもにとって一番身近で＜自分＞を伝える有効な手段なのです。

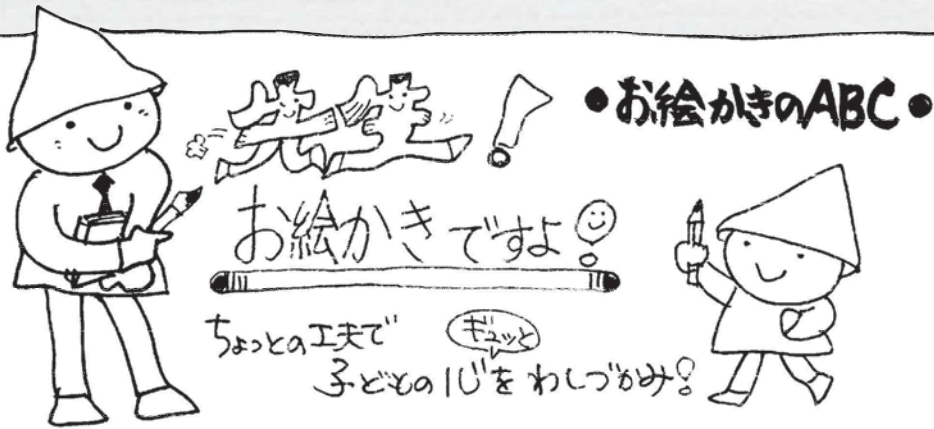
絵（マンガ）を囲んで、親子のコミュニケーションが成立しているのです。教室でも、子どもたちと先生とのコミュニケーションが、＜マンガ＞で成立しているとしたら、その空間はあたたかな場となるはずです。

次のページから資料編として、手塚治虫の著書『漫画の描き方』を参考にしたものを掲載しました。

その本の中には、お母さんがかくマンガの項があり、子どもにとって、一番身近な人のかく絵が何よりの愛情であると書いています。

「絵をかく」というと緊張する人も多いかと思いますが、「お絵かき」（マンガ）というとなんだか、気持ちも軽くなりませんか。本来「絵」は、自分の意志で自由にかくものでありませんでしたか？

さあ、みなさん、お絵かきを楽しみましょう。



→ 板書に おたよりに 子どもの一トに
活用法はいろいろ

😊 じに備えておきましょう!!

- 1. 楽しかったら それでよし!
- 2. 「絵」の「具」には子どものさがそう!
・人・動物・もの

3. はじめに 絵や図をシリアウト!
文字情報は、短く必要なことをかく

4. いただきます! 小道具でより 楽しく!

5. 有名なキャラクターを真似て 「似てない!」といわれよう
Myキャラクターをつくろう

手塚治虫のこぼれから

「教師になる人は少なくとも漫画の「ま」の字くらい知っていて(中略)子どもとの理解を深めるべきだと思う」(P228)

—手塚治虫「マンガの描きかた」
光文社 カップホームス
1977年(初版)※復刻本あり時。

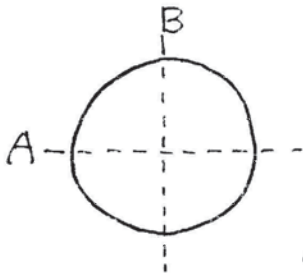


おしらせ

どんなにつたなくとも
ごちなくとも、お母さん
が、おが子に描く絵には
かぎりない愛がある。
—手塚治虫—



人をかき(顔) ①

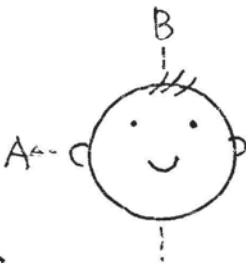


目の位置は年齢を表す



▶ 赤ちゃん

- 中心線(A)から下方に、両目を離してかく
- 口は、目の線と同じくらいの高さにかく



▶ 子ども

- 目を中心線(A)の上か、(B)に近づけてかく



▶ 大人

- 丸型より卵形にするとよい



男女は髪型でかき分ける



▶ おとしお



鼻の横にほぐれい線を(ハの字)かく

いろいろ工夫してみよう



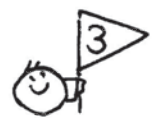
とにかくかいてみる



人をかき (顔) ②



鼻は 向きを表す



表情は. まゆ. 口. 目で表す



人をかき(全体) ③



体は、かいたんでよい。

大小関係は比べるもの
があるわかる。



女子

男子



スカート

スパン

・服装や小道具で表す

赤ちゃんは、2頭身



手足は動きを表す

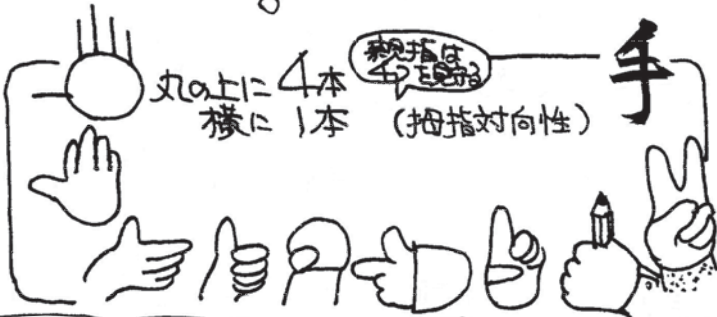


手足は
自由に
のびる

流線をかいてとろく!



いろいろ工夫できるね。



丸の上に4本
横に1本
親指は
対向性
(拇指対向性)

手



さあ、どうぞ!

動物をかく

6 動物は耳で表す 形をかると



目を工夫すると 顔の形を工夫すると



7 しっぽも効果的!



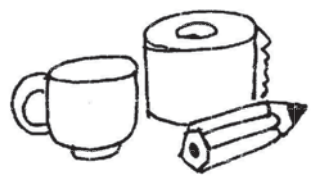
8 体はかんたん!



いろいろ工夫してみよう!



もっと楽しく

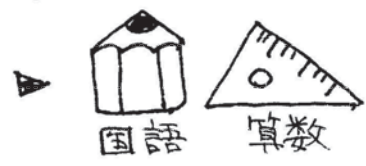


小道具だって動き出す

身の回りのものにも命をよたせよう



工夫したい"こな"ことも



国語

算数

子どもと絵を語号として共有化する



強調

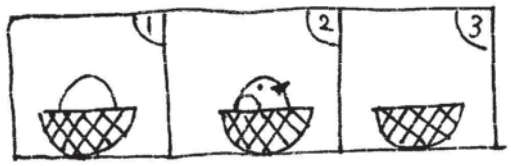


わがた!

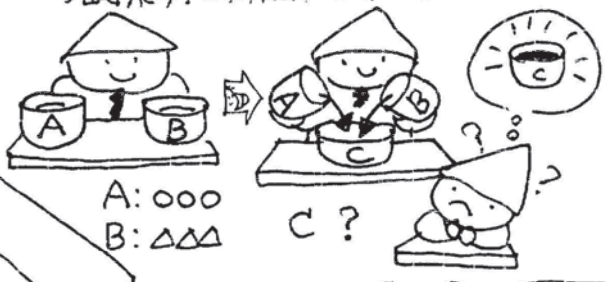
ホッ!

おいた!

時間の流れは、コママンガで!



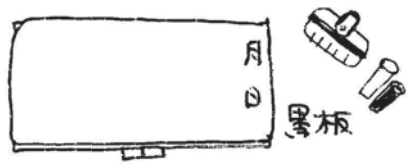
指導案の本時の流れもマンガで



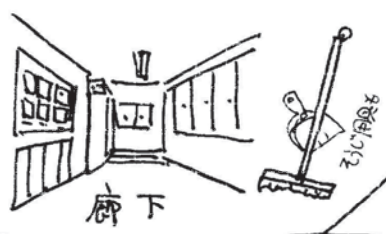
A: ooo
B: △△△

C ?

●学校の小道具



黒板

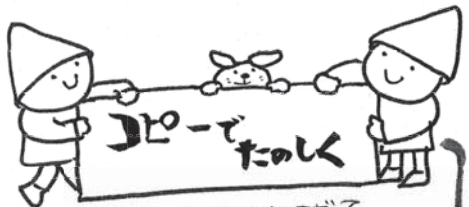


廊下

掃除機



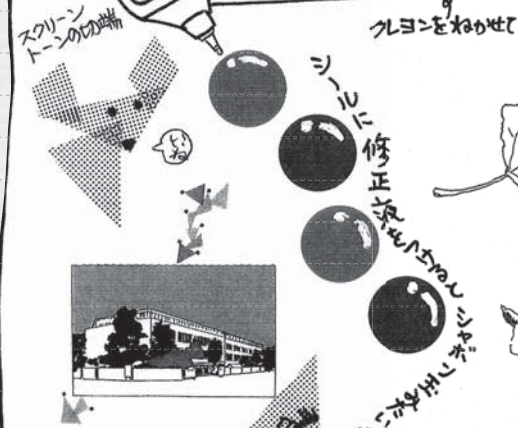
蛍光ペン(黄)を
いちどだけ



色画用紙をちぎって



画用紙で掲示物をつく!



34 自分を見直す10のルール

子どもに対して

やってはいけない10のルール

- 1) 名前を呼び捨てにする
- 2) 上から目線で対応する
- 3) 欠点を探して叱る
- 4) 聞いている振りをする
- 5) 顔を見ないで対応する
- 6) 返事をしない
- 7) 約束を守らない(あとで・～するからね)
- 8) 指差して指名する
- 9) 掃除をしない
- 10) えこひいきをする

授業中に

やってはいけない10のルール

- 1) 腕組みをする
- 2) 机に手を付いたり座ったまま指導したりする
- 3) サンドル履きで授業をする
- 4) 赤刷り指導書で授業をする
- 5) 授業中に忘れ物を取りに行く
- 6) 下品な言葉を使う
- 7) 特定の子どもだけに声をかける
- 8) 誤答を笑う(間違いと違い)
- 9) 時間を守らない(開始・終了時間)
- 10) 字がきたない(板書が雑)

はじめは緊張して気を付けていたことも、いつの間にかうやむやになって現在に至っていることがあります。「無くて七癖有って四十八癖」といいます。易きに流れやすい私たちですから、癖になる前に他者の目で見直してみることが大切です。いくつチェックが付きましたか？

自身を見直し改善することで授業が変わるとしたら、子どもにとって先生の授業が喜びに変わります。

職員室で

やってはいけない10のルール

- 1) 訪問者に挨拶しない
- 2) 電話の対応ができない
- 3) 机上が乱雑(机にお菓子がある)
- 4) 大声をあげる(ひそひそ話をする)
- 5) 会議の時にテストの採点をする
- 6) 猥雑な話をする(ハラスメント・子どもをもののように扱う)
- 7) 公私の区別がつかない(文房具・備品)
- 8) 場や状況に合った服装をしない
- 9) 子どもや親の悪口を話す(守秘義務と情報の共有の区別ができない)
- 10) 事務処理が遅い(提出物や金銭処理ができない)



- ※ 大田堯ほか『岩波講座教育の方法3—子どもと授業』岩波書店 1987
- ※ ディヴィッド・エルカイント著、戸根由紀恵訳『急がされる子どもたち』紀伊國屋書店 2002
- ※ 伏見陽児・麻柄啓一『授業づくりの心理学』国土社 1993
- ※ 青木幹勇『いい授業の条件』国土社 1987
- ※ 佐伯胖ほか『すぐれた授業とはなにか〜授業の認知科学』UP 選書 東京大学出版会 1989
- ※ 国分一太郎『教師—その仕事』岩波新書 1956
- ※ 市川昭午『教職を志す人のために—これからの学校と教師』明治図書 1976
- ※ 河合隼雄『子どもと学校』岩波新書 1992
- ※ 中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波新書 1992
- ※ デューイ著、宮原誠一訳『学校と社会』岩波文庫 1957

おすびにかえて

この本には、感じたこと考えたことをそっと載せました。言葉足らずで理解できないところもあったかと思います。

そこは、先生の感性で感じ取っていただけたら幸いです。

『いのちのいろえんぴつ』という絵本があります。

田島加純さんがかいた詩と絵が載っています。

その中に「12色」と題した詩があります。

ここには 12色の いろがある
目立たない色もあるけれど
みんな
がんばってる
ひとつひとつ

教室の一人一人の子どもの顔を思い浮かべて、もう一度、この詩を読んでみてください。

この詩は10歳の時に、脳腫瘍を発症した加純さんが、麻痺した右手にかえて、左手で一字一字心をこめてかいています。しかし加純さんは、小学校6年生で帰らぬ人となりました。

子どもの「思い」は、子どもの「いのち」です。

先生という仕事は、子どもの「いのち」と向かい合っています。

さあ、教室で一つ一つ輝いてる子どもたちの いのちの色を 感じてください。

* 豊島加純：詩／絵、こやま峰子：文『いのちのいろえんぴつ』教育画劇 2006



平成24年4月

平成25年4月



北海道教育大学 岩見沢校 美術教育研究室
阿部 宏行

abe.hiroyuki@i.hokkyodai.ac.jp

発行日 平成26年5月15日

1954年生まれ。北海道教育大学岩見沢校准教授。
評価規準、評価方法等の研究開発に関する検討委員会（小学校図画工作）委員、
学習指導要領の改善等に関する調査研究（小学校図画工作）協力者などを歴任。

主著：『図画工作の指導と評価』（東洋館出版社、共著）、

『観点別学習状況の評価規準と判定基準（小学校図画工作）』（図書文化社、共著）、

『私がつくる図画工作の授業』（日本文教出版、共著）

日文の書籍シリーズ



私がつくる図画工作科の授業 ふぞろいな 学習指導案

編著 岩崎由紀夫
阿部宏行
定価 **2,160**円(本体2,000円+税8%)
B5判 130頁 ISBN978-4-536-60042-2



生活科の 理論と実践

「生きる力」をはくむ
教育のあり方

編著 木村吉彦
定価 **2,160**円(本体2,000円+税8%)
A5判 240頁 ISBN978-4-536-60058-3



社会科の 新しい使命

～『小学社会』のめざすもの～

編著 的場正美
池野範男
安野功
定価 **2,160**円(本体2,000円+税8%)
B5判 196頁 ISBN978-4-536-60062-0



算数の授業で 「メタ認知」を育てよう

監修 重松敬一
定価 **1,944**円(本体1,800円+税8%)
A5判 168頁 ISBN978-4-536-60061-3

学習指導要領対応・教科書準拠

書写・算数・理科・生活・音楽・図画工作・家庭

小学校版

ようぐる

“用具の使い方” Web動画コンテンツ

収録用具 **60**点 動画クリップ数 **255**点

クリップ長さ **平均30秒**(最長1分40秒)

特長

- 電子黒板や 프로젝タを効果的に活用!
- 手順やアングルなどで分けたクリップ構成!
- くり返し、ふり返りが何度でも簡単!
- 一斉、協働、個別のあらゆる学習で!

■価格**270,000**円(本体250,000円+税8%)

“用具の使い方”のデジタル教材!



お試し体験もできる!

詳細はWebサイトへ!

書籍は、書店、ブックサービスでお求めください。
ソフトウェアは、お近くの学校出入りの販売代理店でお求めください。
※商品のお問い合わせは、お手数ですが、裏面所在地より小社大阪本社業務部へお願い致します。



子どもと先生を育てる 授業のABC

日文教育資料

平成26年(2014年)5月15日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社

〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5

TEL: 06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33234

日本文教出版 株式会社

<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-187F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690